



太陽光発電の技術について説明を受けるミクロネシア連邦の住民たち＝2019年11月(島村さん提供)

# 環境問題 世界に目を

いわき島サミットから10年

太平洋・島サミットが、2015年に開催された第7回太平洋・島サミットが、10年経ちました。18年に第8回会合も開かれた同市では、島サミットを契機とした島しょ国との草の根交流が続いている。関係者は、現地では地球温暖化や漂着プラスチックなど環境問題への危機感が強く、学ぶことが多く、指摘。「原発事故で大きな環境被害を受けた私たちだから、世界の環境問題に関心を持つべきだ」と交流の意義を語る。



ミクロネシア連邦を定期的に訪れている島村さん。「世界の環境問題に関心を持ってほしい」と話す

【Q】太平洋・島サミット 政府がオセアニア地域の協力機構「太平洋諸島フォーラム(PIF)」加盟国・地域の首脳を招き、環境や防災、海洋資源など地域が直面する課題を話し合う会議。1997年に始まり、3年ごと日本で開催している。2015年と18年はいわき市で開催された。

## 太陽光発電きっかけ

「電源をつくる技術を教えてほしい」。15年、小名浜港で開かれた島サミットの関連イベントで太陽光発電を紹介していたいわき市の島村守彦さん(67)は、島サミットに参加したミクロネシア連邦の駐日大使から声をかけられた。長く続く交流の始まりだった。小中学校などで太陽光パネルを手作りするエネルギー教室を開いていた島村さんは、市や国際協力機構(JICA)の事業で同国を度々訪問。19年には電気の通っていない同国フオソトニ島にパネルを設置し、現地の人々に動かし、現地の人々から支援を受けた。世界に目を向け、助け合いの精神を築き、取り組んだ。その後、

## 続く草の根交流、危機感共有



第7回太平洋・島サミットで記念撮影に臨む安倍首相(当時、前列左から4人目)や島村さん(2015年5月2日、いわき市・サリット・ハワイアンズ)

被災のトンガに支援 島サミットが、多くの市民の意識を変化させたと指摘する声もある。「長年いわきで暮らしているが、トンガに心があるのは親しい人だけだ。でも島サミットの後はいくらも知らないという人が増えた」とトンガ出身の水田リゼン(68)は話す。22年1月にトンガ沖の海底火山が噴火し、同国に大きな被害が出ると、水田さんの元にはたくさんのお金が寄せられた。「うれしかった。サミットがあったから」。支援が広がったのだ。水田さんは今後両国の架け橋として活動する考えだ。「トンガはお年寄りを地域ぐるみで大切にする社会。その文化を日本に伝えたい」(須田綱一)

島サミットを契機とした島しょ国との交流の意義を、関係者はどのように語っていますか。

島村守彦さんは、島サミットをきっかけにどのような交流(活動)をしていますか。

いわき市と島しょ国との交流に関して、皆さんはどのようなことを考えましたか。